

[理事長講演]

医史学が解き明かしたこと、物語ること

坂井 建雄

順天堂大学

医史学 History of medicine は医学・医療の歴史についての研究・学問である。その醍醐味は医学・医療に関する新たな史実を発見するところにある。史実は医学史の物語の中に位置づけられ、新たな史実は医学史の物語を豊かにし、物語を修正することもあるだろう。そして史実が積み重ねられていくと、そこに新たな医学史の物語が生まれてくるに違いない。しかしそれは容易なことではない。

私はまずヴェサリウスの解剖学について知りたく思い、『ファブリカ』と『エピトメー』の内容を分析して医史学雑誌に発表し(1997)、O'Malleyによる伝記(1964)を翻訳した(2001)。またガレノスの解剖学書の原典の読解を池田黎太郎先生らと行った(京都大学学術出版会2011)。そこからガレノスの解剖学の内容が驚くほどに精緻・正確であり、ヴェサリウスの解剖学の99%以上がガレノスの解剖学そのものであることが明らかになった。医学史の書物では数多くの医師がヒーローとして紹介され、医学の歴史においてはいくつもの変革が繰り返されてきたように見えるが、実際はそうではなく、古い医学の礎の上に新しいものが少しずつ付け加えられて現代の医学がつくり上げられてきたことを確信し、原典を基に解剖学の歴史『人体観の歴史』(岩波書店, 2008)を著した。

科学の歴史と医学の歴史の関係も気になるテーマであった。物理的科学では17世紀に科学革命が起こったとされるが、医学が変革を始めたのはずっと遅れて19世紀以後のことである。また科学論者が描く科学史と科学者が描く科学史では、科学革命についてまったく逆の見解が示される。1990年代の米国では科学論者と科学者の間で「サイエンス・ウォーズ」と呼ばれる激しい論争が生じ、その対立はいまなお解消していない。

医学の歴史においては、西洋医学が19世紀に大きく変容したことが知られている。アッカークネヒトはその変化を病宅医学、病院医学、実験室医学と表現し(1955)、フーコーは病理解剖学が医学の眼差しを変えたことを示した(1963)。さらに19世紀中葉には麻酔と消毒法により外科手術が安全になり適用が大きく拡大した。これまでの医学史はそこに留まっていて、大きな未解決の問題が残されていた。18世紀までの西洋医学は何をしていたのか？なぜ西洋医学だけが発展・進化をして現代医学を生み出したのか？

この疑問をもちつつ重要な医学者(サレルノ医学校、ゼンネルト、シデナム、プールハーフェ、ソヴァージュ、ヴンダーリヒ)の伝記と業績の研究と、個別の疾患を扱う医学書の網羅的な調査を行い、医史学雑誌と医譚に発表した(2010-15)。これらの研究を通して、18世紀以前の西洋伝統医学が現代医学とまったく異なる構造を持つこと、おもに4つの教科(①医学理論、②医学実地、③解剖学/外科学、④植物学/薬剤学/化学)で教えられていたことが明らかになった。その内容のほとんどは、経験に基づく診断・治療法(経験的医療)ないし実証によらない理論(推論的考究)と見なせるものであり、この2つの要素は他の伝統医学(アーユルヴェーダ、中国伝統医学、ユナニ医学)にも共通する。西洋伝統医学ではこの2要素に加えて、解剖学による人体の探究(科学的探究)を行っており、外科手術には多少役立ったが、内科疾患の治療には役立っていなかった。しかし連綿として続けられてきたこの科学的探究が、19世紀以後に科学的探究を行う基礎医学の諸学科(生理学、生化学、病理学、薬理学など)を生み出し、その研究成果と医療技術が臨床医学を発展させ、西洋近代医学を生み出したのである。史実と資料に基づくこの新しい医学史の物語は、拙著『図説 医学の歴史』(医学書院2019)の中で描かれている。